

派生動詞と使役交替

大石 強

0. はじめに

本稿では、接尾辞付加により派生された動詞の特徴から検討するという新しい観点から、(1)のように使役交替(causative alternation)¹で他動詞形と自動詞形のどちらが基底であるかを決定する。

(1) a. John broke the window.

b. The window broke.

使役交替が可能な動詞は、Levin and Rappaport Hovav (1995) や Tsujimura (1999) で論じられているように、二つの意味的条件を満たすものである。一つの方法は、動詞の表す出来事が外的原因(external cause)により引き起こされるという意味をもち、その外的原因を表すものを主語に取るということである。もう一つの方法は、その外的原因を表す主語に意志を持つ(volitional)「動作主」(AGENT)だけでなく、意志を持たない「原因」(CAUSE)も許す動詞であることである。

(2) a. Mary broke the window.

b. The window broke.

(3) a. John laughed.

b. *The teacher laughed John.

(2)の **break** は、動詞によって表される変化を受ける目的語の外に、その変化の原因がある。このように外的原因を主語に取る動詞は使役交替を許す。これに対して、(3)の **laugh** という行為は、主語として現れている有生物の内部から自然に湧き出てくるものであり、内的原因によるものと考えられる。従って、上で述べた条件を満たさないため、使役交替は許されない。

二番目の条件について見る。

(4) a. The storm broke the window.

b. The window broke.

(5) a. My father wrote the story.

b. *The story wrote.

(4)のように使役交替できる動詞は、外的原因として主語に意志を持たない「原因」を取れる。これに対して、(5)の **write** は、主語が外的原因を表しているが、必ず意志を持つ「動作主」しか取らず、使役交替が許されない。さらに言うと、**break** でも、主語に「動作主」しか取れないような目的語を選択すると、使役交替が許されなくなる。

(6) a. John broke his promise.

b. *The storm broke his promise.

c. *His promise broke.

(6)のように、「約束を破る」という表現に用いた **break** は主語に「原因」をとることができず、二番目の条件を満たすことができないため、使役交替が起こ

らない。

このように使役交替を許す動詞であるか否かを定める条件はかなり明らかになってきているが、(1a)の他動詞形から(1b)の自動詞形が派生されるのか、あるいはその逆であるのかということに関しては異論がある。本稿では、使役交替を起こす動詞を派生する接辞付加を検討することにより、英語の使役交替は、他動詞形が基本形であり、自動詞形が派生形であると論ずる。

1. 先行研究に見られる使役交替の方向

使役交替が他動詞を基にしているか自動詞を基にしているかについては、異なる主張がある。ここでは、いくつかの代表的な議論を挙げることにする。

Levin and Rappaport Hovav (1995)は、使役交替をする動詞は内在的に二項動詞であり、他動詞形の方が基本的であると論じている。その根拠の一つは、使役交替を起こす動詞において、次の(7)-(10)に見られるように、他動詞の目的語の方が自動詞の主語より広い選択範囲をもつということである。すなわち、制限の少ない方が基本的であると考えられるので、他動詞形が基本となると主張している。

(7) a. John broke the vase/the window/the bowl/the radio/the toaster.

b. The vase/The window/The bowl/The radio/The toaster broke.

(8) a. He broke his promise/ the contract/the world record.

b. *His promise/ The contract/The world record broke.

(9) a. John opened the door/the window.

b. The door/The window opened.

(10) a. This book will open your mind.

b.*Your mind will open from this book.

Levin and Rappaport Hovav (1995)が挙げるもう一つの根拠は、自動詞形が原因項をどこかのレベルで有していることを示す例が存在することである。

(11) a. The plate broke by itself.

b. The door opened by itself.

(11)の *by itself* は、「外からの助けを借りないで (*without outside help*)」という意味で、外的原因の項を抑制していることを示している。

影山 (1996; 2000) も、英語で広範に見られる能格動詞 (*break, open* など) の使役交替に関して、使役他動詞の語彙概念構造 (*Lexical Conceptual Structure*) を基本として、自動詞用法は反使役化 (*anti-causativisation*) という操作により派生されると論じている。反使役化というのは、語彙概念構造において使役者を被使役者と同一であると見なす操作として定式化されている。

(12) [x CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]

→ [x=y [y BECOME [y BE AT-z]]]

自動詞形が使役交替の基本であるという逆の主張もある。Pesetsky (1995) は、目的語経験者動詞 (*Object Experiencer Verb*) の特異性を説明するために提案したゼロ形態素 *CAUS* が、使役交替を起こす語根に付加されて派生されると主張している。すなわち、他動詞形の方が形態素を余計に持つ派生形であると実質的に主張している。そこでは、次のように自動詞形と他動詞形が考えられている (ただし、他動詞形の派生は明示されているが、自動詞形の派生は筆者の推測による)。

(13) a. 自動詞形: $\sqrt{\text{grow}} \rightarrow \text{grow}$

b. 他動詞形: $\sqrt{\text{grow}} + \text{CAUS} \rightarrow \text{grow}$

このように仮定するのは、使役交替を起こす動詞が名詞化されたとき、使役の意味（他動詞の意味）を首尾一貫して欠くという現象が見られ、この現象が、CAUS というゼロ接辞を仮定することにより、「ゼロ接辞付加により派生された語は、さらに派生形態素を付加することを許さない。」という Myers (1984) の一般化を使って説明できるからである。Pesetsky (1995) は、次のような例を挙げている。

(14) a. Tomatoes grow.

b. Bill grows tomatoes.

c. the growth of tomatoes

d. *Bill's growth of tomatoes

(15) a. The string vibrated.

b. The bow vibrated the string.

c. the vibration of the string

d. *the bow's vibration of the string

しかしながら、Pesetsky の提案に問題がないわけではない。使役交替を起こす動詞が名詞化されたとき、動作主性が示されると他動詞形が出てくることを説明しなければならない。次の (16d) が示すようには、他動詞形の名詞化が可能である。

(16) a. The huge rock moved.

b. They moved the huge rock.

c. the movement of the huge rock

d. their movement of the huge rock to construct a road

Pesetsky (1995) のもう一つの問題点は、(13a) の自動詞形の派生である。他動

詞形は、(13b)のように、目に見えない接辞 CAUS を付加することにより派生されるために Myers の一般化により名詞化形をもてないとされている。そうであるならば、自動詞形は語根に何も付けずに派生されていると考えられる。しかしながら、目的語経験者動詞では、語根がそのままの形では生じないと仮定されている。従って、語根の性質をもう少し厳密に特徴付けなければならないという課題が残っている。

Pesetsky (1995) の他にも、自動詞形が使役交替の基本であると主張するものがある。丸田 (1998) は、Talmy (1985) に従い、語彙的使役動詞の表す使役に二つあると区別した。同延的使役動詞とオンセット使役動詞である。同延的使役動詞は、使役主の完全な責任による結果出来事の惹起を表し、変化側が主管する独立した下位出来事が含まれていないと仮定する。従って、使役交替が起こらないことになる。次が同延的使役動詞の例である。

(17) a. He built a new house.

b. *A new house built.

これに対して、オンセット使役動詞では、結果出来事に自立性・独立性が備わっており、使役主はその活性化に責任を持つだけであると述べられている。使役交替は、このオンセット使役動詞に可能であり、自立タイプの自動詞的出来事を表す始発の語彙概念構造 (Initial Lexical Conceptual Structure) に、始発出来事を表す意味構造の随意的付加から得られる二つの語彙概念構造により説明されると述べられている。動詞 *break* の始発の語彙概念構造、自動詞用法の語彙概念構造、他動詞用法の語彙概念構造は、次のように仮定されている。

(18) *break* の始発の語彙概念構造

[_y DEVELOP-SEPARATION] CAUSE [BECOME [_y IN-PIECES]]

(19) 自動詞 **break** の語彙概念構造

[y DEVELOP-SEPARATION] CAUSE [BECOME [y *IN-PIECES*]]

(20) 他動詞 **break** の語彙概念構造

[[x ACT ON y] INITIATE [y DEVELOP-SEPARATION]] CAUSE
[BECOME [y *IN-PIECES*]]

(18)-(20)の語彙概念構造から分かるように、自動詞形が始発の概念構造と同じ概念構造をもち、自動詞形の方が基本的と考えられている。

以上のように、使役交替を起こす動詞の自動詞形と他動詞形のいずれを基本形と見なすかについて意見の相違がある。次節からは、使役交替を起こす動詞の派生という観点から基本形を検討する。

2. 使役交替を起こす動詞の接辞付加による派生

本節では、使役交替を起こす動詞を派生する接尾辞として、*-ize*, *-ify*, *-en* の三つの動詞形成接辞付加を検討する。

接尾辞*-ize*は、Quirk et al.(1985)も述べているように、形容詞または名詞に付加される。この接辞付加に関しては、Keyser and Roeper(1984)で論じられている。そこでは、(21)のような動詞が挙げられており、それらはすべて適切な状況で使役交替(彼らの用語では能格規則)すると述べられている。

- (21) *alkalinize* , *alkalize*, *Americanize*, *anatomize*, *automatize*, *channelize*, *demagnetize*,
demilitarize, *demobilize*, *equalize*, *federalize*, *generalize*, *harmonize*, *hybridize*,
liberalize, *localize*, *magnetize*, *materialize*, *mechanize*, *militarize*, *mobilize*,
neutralize, *nomalize*, *organize*, *oxidize*, *polarize*, *pressurize*, *regularize*, *reorganize*,
revitalize, *stabilize*, *standardize*, *synchronize*, *urbanize*

- (22) a. We generalized the solution.
b. The solution generalized.
c. We centralized the department.
d. The department centralized.
e. We demagnetized the recording head.
f. The recording head demagnetized.
g. The Republicans want to Reaganize the country.
h. The country refuses to Reaganize.

しかしながら、Keyser and Roeper (1984) は、すべての動詞が使役交替の自動詞形をもつわけではないと論じ、次のような例を挙げている。

- (23) a. We penalized John.
b. *John penalized.
c. We terrorized the community.
d. *The community terrorized.

(23)の例はいずれも、他動詞形で主語に動作主以外のものを認めない動詞を含んでいる。すなわち、いずれの動詞も人間の営みを表しているのである。従って、使役交替の意味条件を満たさず自動詞形が存在しないことになる。同様に自動詞形を持たない動詞として、次のものが挙げられている。

- (24) authorize, capitalize, characterize, dramatize, demoralize, sympathize, utilize,
visualize

このことから、Keyser and Roeper は、使役交替では他動詞形を基本として自動詞形が能格規則により派生されると考えている。

Marchand (1960) も、-ize 付加により派生された動詞では、自動詞のグループの方が他動詞のグループに比べて遙かに小さいと述べている。

次に、接尾辞 -ify を見てみる。Marchand (1960) は、この接尾辞がラテン語の *ificare* に遡り、*facere* (= 'make') と同じ語根から来ていると述べている。すなわち、語源的には使役形を作る接辞として生まれたものである。それでは、現代英語ではどうであろうか。Quirk et al. (1985) では、この接辞は、形容詞または名詞に付加され動詞を派生するとだけ述べられており、他動詞・自動詞の区別については触れられていない。

接尾辞 -ify 付加により派生された動詞が使役交替を起こすことは、次の例から分かる。

(25) a. The autumn rain intensified the odor of fallen leaves.

b. The odor of fallen leaves intensified.

(26) a. The hot weather acidified many bottles of good wine.

b. Many bottles of good wine acidified.

(27) a. The atmosphere of the party jollified the guests.

b. That is why the guests jollify.

(28) a. Ultra-sonic audio waves can jellify bone in seconds.

b. These starch products are polysaccharides that jellify when exposed to heat.

ここで、小西他 (編) (1999) の辞書に記載されているすべての -ify 形動詞を検討してみると、数の上では、他動詞用法のみをもつ動詞が圧倒的多数で、次に使役交替を起こす動詞が来る。自動詞用法のみをもつものは次の二つだけであった。

(29) **speechify** 「演説する, 熱弁を振るう, (偉そうに) 一席ぶつ, ...」

preachify 「押しつけがましく [くどくど] 説教する, ...」

しかしながら、上記の動詞は使役交替に関わる動詞ではない。使役交替に関与する自動詞の主語は、対応する他動詞の目的語と同じ意味役割を有し、状態変化を受けるものである。(29)の自動詞は、その意味から分かるように、主語が人間であり、動作主という意味役割を担っている。また、意味的にも、-ify 形動詞が一般に有する使役の意味とは異なっている。Marchand(1960)では、speechify が 1723 年に、preachify が 1775 年に、'make look like, give the (undesirable) appearance of ...'という滑稽な意味合いをもって作られたと述べられている。従って、この二つの自動詞は別にして考えてよいと思われる。

以上のように見てくると、-ize 形動詞と同じく、-ify 形動詞も、(29)の例を除けば、-ify 派生形の一部が使役交替を起こしていると結論づけることが出来る。

最後に接尾辞-en を検討してみよう。この接辞は形容詞に付加され、これにより派生された動詞は、使役交替を起こす。Marchand(1960)は、-en 付加により派生された動詞は、他の形容詞由来動詞と同様、状態変化を表すと述べ、darken を例に挙げ、他動詞使役用法で「暗くする (make dark)」を表すこともでき、自動詞用法で「暗くなる (become dark)」を表すこともできると述べている。Quirk et al.(1985)も、-en 付加により派生された動詞が使役用法と共に多くが自動詞として用いられると述べ、次の例を挙げている。

(30) a. The news saddened him.

b. His face saddened.

また、Levin and Rappaport Hovav(1995)も、英語の形容詞は状態を表すものであり、従って、使役交替を起こす、状態変化の動詞の多くは形容詞から派生されていると論じている。

ここで、小西他(編)(1999)の辞書に記載されているすべての-en 形動詞を検討してみると、他動詞用法のみをもつものは、(31)の四つの動詞であり、自動

詞用法のみをもつものは、(32)の二つの動詞であった。²

(31) **chasten, neaten, safen, straiten**

(32) **pinken, limpen**

先行研究が論じているように、ほとんどの-en 形動詞が使役交替を起こすということが確かめられた。上記(31),(32)の動詞の使役交替については、インフォーマントは次のように判断した。

(33) a. John neatened his desk.

b.*His desk neatened.

c.?They safened the poisonous substance.

d.*The poisonous substance safened.

(34) a.?The warm weather pinkened the peaches.

b. The peaches pinkened.

c.???The hard work limpened his body.³

d.???His body limpened after the hard work.

(33)の他動詞用法のみが辞書に記載されている動詞は、その意味から、他動詞の主語に動作主を要求している。従って、使役交替を起こした自動詞用法の方が容認不可能となっている。これに対して、辞書に自動詞用法のみが記載されていた動詞は、(34)のように、他動詞用法の方も全く容認不可能ということにはならない。従って、-en 形動詞はほとんどが使役交替を起こすが、その使役交替を起こす動詞は-en 派生形の一部であると結論づけることが出来る。

3. 使役交替の方向

前節で、接尾辞 *-ize*, *-ify*, *-en* が付加された派生動詞では、使役交替を起こす動詞が派生動詞の全体集合に対して部分集合を成すということを見てきた。語形成においては、ある場合には他動詞だけを派生し、ある場合には他動詞と自動詞を派生するという操作は許されない。これは、一様性の原則 (Uniformity Principle) により、形態的操作が個々の適用において異なる効果をもたらすことが出来ないためである。Chomsky (1981) は、次のように一様性の原則を述べている。⁴

(35) UNIFORMITY PRINCIPLE

Each morphological process either

- (i) transmits θ -role uniformly,
- (ii) blocks θ -role uniformly, or
- (iii) assign a new θ -role uniformly.

そうすると、本稿で取り上げた動詞形成接辞は、それぞれ一様に他動詞または自動詞を派生しなければならなくなる。一方で、(1) で見たように、接辞付加を伴わない使役交替と呼ばれる操作が存在する。この使役交替は動詞に適用されるものである。従って、使役交替が動詞派生に先だって行われることはない。もし、本稿の動詞形成接辞が自動詞を派生するのであれば、派生された自動詞に基づいて使役交替が起こることになり、派生動詞の中に他動詞形のみが存在するという事はありえない。従って、動詞形成接辞は他動詞を派生し、その他動詞の中で前に述べた意味条件を満たすものが使役交替を起こすと考えられる。このことから、使役交替の出発点となるのは他動詞形の方であると結論づけられる。

4. おわりに

使役交替の方向性については異なる主張が存在しているが、本稿では、接尾辞-ize, -ify, -en が付加された派生動詞を説明するためには、他動詞形が使役交替の基本形と仮定すべきであることを論じた。

注

* 本稿の例文に一部について、新潟大学外国人教師Jennifer Holtさんと新潟大学客員研究員Nicholas Henckさんの二人のイギリス人に判断をしていただいた。ここに記して感謝の意を表す。

1. 正確には、使役起動交替(Causative/Inchoative Alternation)と呼ぶべきであるが、本稿では簡略化した名称を用いる。
2. 接尾辞-en付加が可能な形容詞は、単音節で一つの阻害音(obstruent)で終わっていないと音韻出力条件を満たさなければならないため、派生される動詞の数は、本稿で取り上げた他の動詞形成接辞による派生動詞より少なくなる。
3. このlimpenを含む二つの例文については、非常に奇妙(very strange)であるという判断を受けた。二人のインフォーマント共に、limpenという語が存在することを知らないことから、例文の低い容認可能性が出てきていると思われる。
4. Randall(1988)は、Chomskyの原則を修正して、次の一様性の原則を提案している。

Each morphological process either

- (i) transmits θ -role uniformly,
- (ii) blocks θ -role uniformly, or
- (iii) assign a new θ -role uniformly

and

- (i) transmits category uniformly or
- (ii) blocks category uniformly.

参考文献

- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," R. Jacob and P. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, 184-221, Waltham, Ginn, Massachusetts.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点一』くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』ひつじ書房.
- Keyser, S. J. and T. Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry*, 15, 381-416.
- 小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明 (編) (1999) 『CD-ROM版ランダムハウス英語辞典Version 1.1』小学館.
- Levin, B. and M. Rapaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1998) "Morphology and Lexical Semantics," in A. Spencer and A. M. Zwicky, eds., *The Handbook of Morphology*, Blackwell Publishers, Oxford.
- Marchand, H. (1960) *The Categories and Types of Present-Day English Word-formation: A Synchronic-diachronic Approach*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー：語彙的使役動詞の語彙概念構造』松柏社.
- Myers, S. (1984) "Zero-Derivation and Inflection," *MIT Working Papers in Linguistics 7: Papers from the January 1984 MIT Workshop in Morphology*, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Pesetsky, D. (1995) *Zero syntax: Experiencer and cascades*. MIT Press.

- Quirk, R. S., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Randall, J. H. (1988) "Inheritance," *Syntax and Semantics* 21, 129-146.
- Talmy, L. (1985) "Force Dynamics in Language and Thought," *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity at the Twenty-First Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, Chicago, Il 297-337.
- Tsujimura, N. (1999) "Lexical Semantics," in N. Tsujimura ed. *Japanese Linguistics*, Blackwell Publishers, Oxford.